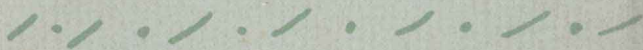
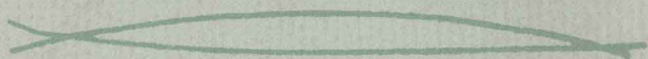




女六人ヒマラヤを行く

細川沙多子



／＼・／＼・／＼・／＼・／＼・／＼・／

朝日新聞社

女六人ヒマラヤを行く

細川沙多子

／＼・／＼・／＼・／＼・／＼・／＼・／

ほそかわ さだこ
細川 沙多子

1918年，福岡県久留米市に生れる。

1960年8月，インド・パンジャブ・
婦人親善隊隊長として，女性6人で
パンジャブ・ヒマラヤのデオ・チバ
峰に登頂。11月末帰国。日本山岳会
会員。現在，ナショナル宣伝研究所
勤務。住所は鎌倉市材木座938。

女六人ヒマラヤを行く

定価 230円

昭和37年1月30日第1刷発行

著 者 細川沙多子

発行者 朝日新聞社 伴 俊彦

印刷所 明善印刷株式会社

発行所 東京・大阪
小倉・名古屋 朝 日 新 聞 社

目次

出発まで

私たちもヒマラヤへ行けるだろうか
ともかくやれるところまで実行してみよう

インドへ出発

いよいよサーダハナ号の船旅だ
期待で胸がわくわくする

ペナン島上陸

見知らぬマラヤ青年の親切な案内
蛇寺と線香の煙と本場の紅茶と

ラングーン到着

隊長と原隊員は一路インドへ
ほかの隊員とはしほしの別れだ

いよいよインドだ

カルカッタよりニューデリーへ
目的地へしだいに近づく

ニューデリーより再びカルカッタへ
インド的スロースローに腹を立てぬこと
日本の風景もみられるではないか

デオ・チバへの道

マンデイはその入り口だ
はじめてインド的民衆の旅館に寝る

マナリー到着

私たちの根拠地マナリーだ
足ならしにロータン峠を征服

マナリー出発

マナリーからナガール橋ぎわまで
ポーター集まらず頭の痛いこと

マナリーよりキアラバン出発

ジャガック谷からデオ・チバへ
第一・第二キャンプ設営する

四五

五二

六五

七一

八二

八六

登頂前の緊張

一〇四

第一次アタック隊をだれにするか
痛いほど皆の気持ちちが響いてくる

登頂まで

一一一

ああ、ついに成功した！
いま、何をいうことがあるうか

マナナ氷河上の島を探る

一一三

ベースのそばの雪男(?)の足跡
シエルバたちの愉快な名まえ

キャラバン帰路

一一四

ベース・キャンブよりマナリーまで
ふと胸にしみる引き揚げの哀歎

マナリーよりパタンコットへ

一一五

貸し切りバスで遊覧旅行気分
グルナナをまつるラマ寺見物

ダラムサラへ

一一六

十四世ダライ・ラマにインタビュ
ー
ガルツェンはじめシエルバたちは大感激

ニューデリーにて

一七五

アグラのタージ・マハール見学
ネール首相との会見

ニューデリーよりカトマンズへ

一八四

あこがれのネパール・ヒマラヤよ
遠く近く機上よりながめること

いよいよ帰国

一九四

帰国準備のあわただしさ
お別れパーティも駆け足だ

付録・遠征経費明細その他

二〇一

あとがき

出発まで

〈 私たちもヒマラヤへ行けるだろうか
ともかくやれるところまで実行してみよう 〉

ヒマラヤ遠征といえは男子でも大仕事。それも山岳会が大学後援の特別な企画と、学術的なものが許されて行くものと思っていた。チョゴリザ。マナスル。ヒマルチュリーと、次々に出版されるヒマラヤの記録に、遠い憧憬をいだいていた私たち女性のみの山の会（ブッシュ山の会）の仲間たちは、一九五八年二月、ジュガル・ヒマラヤへ出発される深田久弥先生たちの食糧の梱包（こんぽう）をお手伝いしたことによって、心の底に一つの中心ができたような気がした。アーチスト・アルパイン・クラブのように気の合ったもの同士で、ヒマラヤへ行けたらどんなに幸福であろうか。女性だけで行けぬものか。世界の女性たちの遠征の記録もないことではない。私たちもなんとかしてヒマラヤへ行きたい。けれどなんといっても資金が問題で、これを三年がかりで貯めてみようと、その時から彼女らはヒマラヤ熱にかかってしまった。

無事帰国された深田先生たちの土産ばなしをきいても、ただポーッとなった。彼女たちの頭の

中は、もう実際にヒマラヤを歩いているような錯覚すら起こして、夢中で地図をみては時を忘れた。集まるとヒマラヤの文献を読み、お金を貯めることを研究し、そして実行に移った。奥川さんは、都会のBGより尾瀬の小屋のほうがムダ使いをしないからと、管理人を志して入山した。浜中さん姉妹は亡きお父さんが結婚資金にと残されたものをあてると決めた。もう二人とも年ごろなのに結婚なんて思いもしない。恋人はヒマラヤである。ヒマラヤへは行きたくとも親に話せば反対されるに決まっている。どうしようといらいらする人もある。ヒマラヤへの熱を秘めて結婚した人も、いつかはご主人を納得させてヒマラヤへ行こうと考えている。深田先生たちが帰国されてからの一年は、ヒマラヤへヒマラヤへの思いが高まって、胸に秘めて置くことさえ苦しくなり、三年が待てなくなった。二年目の秋には、とうとうデオ・チバへ登ったのだが、この計画の最初は、浜中、奥川さんたちが深田先生のお宅を訪れて「考えていないで、勇気を出して実行してごらん」といわれた一年目の夏、すなわち一九五九年の夏からである。浜中さんと奥川さんの尾瀬と東京との手紙の連絡はひんばんになり、やがて私にも、ヒマラヤへ行かないかとの誘いがきたのは、秋の十和田周辺旅行から帰ったばかりの夜だった。相談をうけた私はカメラマンとしてなら行ってみようかという気はあったが、隊長として、やれるかどうか二週間ばかり考えた。日ごろ山歩きはするが、もう年だし、厳冬季の山は歩かないで、もっぱらスキーに行くばかりの私である。年は最年長だが、はたしてやれるかという心配と闘いながらも、とうとうヒマラ

やへ行きたいという思いのほうが強くなって承知した。子どもとも相談してみると、「僕はいよ」と案外簡単な返事だったのでしだいに決意も固まった。できるならブッシュの会員でメンバーを作り上げたい。そのほうが、もう何年も歩き馴れた同士で心強いと、ヒマラヤ希望者たちと毎晩のように話し合った。

メンバーのうち奥川、浜中姉妹は最初から変わらなかった。岡部さんも資金はなんとかなら、是非参加してもいいというご主人の理解ある態度で決まった。山本久子さんも主要メンバーの一人だが、ご主人が病氣中のこととて残念ながらあきらめた。

遠征の日本出発までの仕事のたいへんなことは、本で読んだり話にきいたりした以上の煩雑さで、気が遠くなるくらいむずかしい。まず人と人との接触から始まった。先ず地図の研究。目的の山および周辺の山の歴史。気候風土。それが決まっていたいの隊員の数と予算および日程等等。私たちは一つ一つ、どこまでできるか、やれるところまでやることにした。

深田先生のお宅へは何度お伺いしたことであろうか。夜のふけるのも忘れ、先生のお仕事の忙しさも忘れて、私たちの最初の目的であったガネッシュ・ヒマール付近の出ている本を片っぱしから拝借し、友人にたのんでは翻訳してもらい、ガリ版にして隊員同士に配った。

その間には、先生の研究資料を見たりきいたり興奮の時をすごした。先生の奥様も私たちを勇気づけられ「あなたたちのきらきら輝くひとみは美しい。きっとやれますよ、やりなさいよ」と

応援してください。そのたびに私たちは、発熱したように真赤になって語り合い、ヒマラヤ熱は現地を踏まねばならない、と笑ったものだった。

現地の研究を具体的に始めると、いよいよ私たちはヒマラヤへ行きたいということにからだ全体でぶつかっていった。ともかく何から手をつけてやり出してよいか、まず経験者にあたってきいたり教えてもらうことだ。遠征のいろいろに精通していられる日本山岳会の松田雄一氏に会った。ひどく多忙な松田氏は、私たちの企てに賛成してくださいだったが、

「遠征とは生やさしいものではないですよ。非常にたいへんなことですから、まごまごしてたらできっこありません。それにあなた方初めての女性ばかりの隊ですし、ネパールへの入国許可を取るのも、いまから来年の春山はおそすぎます。シェルパの問題もありますし、もっと研究する必要があるでしょう。インドにも、すばらしい山がありますよ。インドの山を研究してごらんなさい。クルーの奥のパンジャブ・ヒマラヤなど、あまり高くはないがちょうどいいではありませんか。それにインド大使館も東京にあるし、手続きその他便利です。インド大使館には親しい武官もいるし紹介してあげます」

など、きびしいけれど適切な助言を受けた。

ネパール・ヒマラヤへの情熱を傾けていた私たちは、ちょっと息を抜かれたようであったが、よく考えてみると、女性のみの初めての遠征であるということは重大な責任である。もしも失

敗、遭難でもしたら、今後女性のヒマラヤ遠征に暗いかげを作ることになる。ネパール・ヒマラヤは一応この次ということにし、先輩の教えをきいて、私たちはインド・ヒマラヤへの道を研究し始めた。資料の研究はやはり深田先生に頼った。一九五八年の『ウーマンス・オーバールンド・ヒマラヤン・エクスペディション』、一九五六年の『アビンガー・ヒマラヤン・エクスペディション』など、女性のみの遠征隊の記録に接し、インドにあるパンジャブ・ヒマラヤおよびガルワル・ヒマラヤには、前記の女性たちのほかフランスからは故クロード・コーガン夫人、プロビエ・シャベル夫人などの輝かしい記録も残されていた。特にパンジャブ・ヒマラヤへは、わが国からも戦前三田幸夫氏がひとり冬季にロータン峠に入られており、また外務省重光晶夫夫妻も最近インド駐在中に、ニューデリーにいられる田口二郎氏らと入られたということもわかり、私たちも強い魅力を感じ、マナリーをキャラバンの出発点と考えて、デオ・チバ（六〇〇〇メートル）、インドラサン（六二二〇メートル）の両峰を、その目的の山に決めたのである。

なお、一九一二年のブルース大佐とスイスのガイド、フリーラーの偵察から始まったと思われるデオ・チバ登頂への道は、その後一九三九年より一九五一年の間に八回試みられ、一九五二年八月五日、イギリスのグラーフ夫妻とベリル氏によって頂上に足跡を残し、次いで一九五五年、ドイツの若い登山家ルディ・ロット、さらに一九五六年イギリスの女性アイリーン・グレゴリーが、二人のポーターを連れて登頂に成功している。

また、デオ・チバへの道はビアス河沿いに、インド国内でも有数の美しい溪谷クルー・バレーとして有名である。マナリーはここを終点として、ロータン、ハムターの両峠を経てチベットへの道であり、インドの辺地として民族的にもおもしろい点もあらうと、私たちは新しいファイトを燃やした。

三田幸夫氏に会ってマナリーの様子をきいた。もう三十年も前のことだがといって、詳しく現地の模様を話してくださったほか、マナリーに果樹園を開いているイギリス退役軍人ベノン大尉を紹介してくださった。松田氏に紹介していただいたインド大使館、大使付武官カンナ大佐は私たちの試みに大賛成で、いろいろ便宜を図らったうえ、クルー・バレーのスライドまで見せてもらった。またイギリスのアイリーン・グレゴリーさんの住所を知るためには、日本で出版された『女だけのヒマラヤ』の訳者で四国におられる成瀬玲子さんに問い合わせ、イギリスに手紙を出したり、ロンドンに留学中の友人に直接会ってもらって、最近の現地の横顔をきいた。アイリーン・グレゴリーさんからは、理解ある親切な返事とともに、いくつかの地図も送られてきた。最近日本人でこの方面に入られた外務省の重光参事官にもお会いして、話を伺った。あつかましくも度々お宅に伺って、パンジャブ地方の珍しい風習など、私たちは熱心にきき入った。ポーターはラダッキーを使いなさいとか、地図を貸してくださいとしたり、いろいろ参考になった。

またインドの婦人とともに登山をやることを考えて、シュルパ・テンジンの娘ベムベムに誘い

の手紙を出したり、そのほかインディラ・ガンジー夫人、YWCAの先生たちの日本婦人との交友を望む心強いはげましと協力は、私たちを百倍も勇気づけた。

そういった外国との連絡と同時に、計画書の作成や装備の研究なども、松田氏の応援のもとに少しずつ具体化していった。シエルパの問題も、松田雄一氏がアビ登山に参加しているガルツェン・ノルブあて手紙を出して、シエルパ組合との連絡をとってくださった。まだまだ日本国内では内密に準備しつつあったのだが、インド・ダーズリンよりのUP通信が、日本婦人とインド婦人ベムベムやドーマたちと合同して、ヒマラヤ遠征が行なわれると発表した。日本にそれがキャッチされ、各紙が報道したとたんに私たちは多忙になった。さあ、たいへん、まだ日本山岳会の承認も外務省や大蔵省の承認も受けていない。後援の新聞社は、やっと一週間前に私たちの申し出を受け入れてくれた朝日新聞社に決まったばかり、まだ準備整わずというときに、報道陣の騒ぎの中へ巻き込まれてしまったのだ。秋からやり始めて発表されたのが一月二十六日であった。隊員の決定も急がねばならなかった。隊長を私とするこの隊の名称も最初は、パンジャブ・ヒマラヤ遠征隊と決めた。隊員の編成とその役割も最初の七人から、浜中康江さんの家庭の事情による中止によって六人となった。最初から動かない四人と、ドクターとして、慈恵医大の杉本生理の大学院に通っている杉浦さんを十二月に決め、あと一人は英語に堪能でタイプの打てる、隊長のアシスタントというべき重大な役の人を決めるのに少し時間がかかった。いままでも外国との連絡

の手紙を手伝ってもらったり、インド大使館の通訳をお願いしたりしたのは、私の隣に住む社員松富京子さんであった。私としては隊長のアシスタントとして、気心のわかった人のほうが、いろいろと私のわがままにたえてくれるであろうと、できれば松富さんを隊員の一人に加えたかったのだが、山の経験が少なく、いざというときの一同の不安を除くことができず、この人をやめ、浜中慶子さんの山仲間である神戸の原欣子さんにやっと決定した。当時のその役割、年齢、職業および研究課題を書いてみると、

隊長 細川沙多子^{ほそかわさだこ} 四十二歳—涉外、撮影、婦人の生活状態

九州電線K・K・勤務

副隊長 浜中慶子^{はまなかけいこ} 二十九歳—登攀隊長、インド料理の研究

三申鉸工業K・K・勤務

隊員 岡部みちこ^{おかべ} 三十四歳—食糧、教育状態および民族舞踊の研究

都立立川高校教諭

原 欣子^{はら きんこ} 三十歳—涉外、インド辺地における英語の浸透状態

神戸商科大学語学研究室助手

杉浦耀子^{すぎうら しょうこ} 二十六歳—ドクター、辺地における医学

慈恵医科大学大学院（杉本生理）

隊員 奥川雪江 二十六歳—裝備、民芸品の収集、風俗の研究

尾瀬ヶ原第二長蔵小屋管理人

以上の六人が決定した。しかし、それぞれ職業を持つ社会人としての私たちには、職場の許可を得ることが非常にむずかしい。私など東京営業所という少人数で仕事している役がら、長い間の欠勤は許されないことであつた。まして隊長というものは何から何まで顔を出してやらねばならず、社長の不本意ながらの同意を得て、会社の仕事半分に遠征の仕事半分といった日が二月ころから始まつた。都立の高校の先生である岡部さんもその苦しさは変わりない。休職という時期は八月一日からで、その間学校と遠征の仕事のうえに彼女には家庭があつた。浜中さんの会社は特別縁故関係にあつたため、非常に気がねをしながら両方をやつた。杉浦さん、原さんともに大学での研究や教授のつごうなどがあつて、心苦しい立場になつたが、理解ある先生方の図らいで四月ころからは遠征の仕事をやれるようになった。最も身軽でやれたのは奥川さん一人のようだった。奥川さんは長蔵小屋でも家庭でも応援してくれた。裝備係というめんどうな仕事を熱心にそしてよく研究して、私たちのとどかない点をよく考えてくれるのも奥川さんだった。女子が職場を持ちながら、四カ月にわたる長期の休暇をもらうことはなみたいではない。ましてやどの会社でも初めてのケースである。帰国後失職するのでは困るから極力理解してもらうように努力した。休職となり給料なしというケースが二件、給料支給が三件でだいたい話がついた。

この問題は男子の遠征にもつきまとう苦勞なものである。

六人の隊員が決定されると私たちの活動も活発になって、事務所を決めて毎日出勤した。最初は茅場町の奥川さんのお宅にしたが、連日の電話やそのあわただしさに、静かな住いを乱すことの心苦しさもあって、八重洲口の駅前八重洲ピアノの二階の一室を借りることができた。古くから知り合いの、私からいえば父くらいのお年である鶴真吾氏は私の話をききながら「どえらいことをやるものじゃのう。ほかに、だれが来ても貸さないが、お前の勇氣に貸してやろ」と家賃も取らないで提供してくださった。

そして、いよいよ海外渡航の許可を受けるために、遠征の意義、その日程、予算の明細などを至急作成して、それを外務省に提出しなければならない。最初より、提出に至るまで何度書き替え研究したことであろう。

日本の外貨はむだな使用を許されていない。外国の山に登るための外貨というものは、年間に約一万ドルくらいの予算があるのだが、山岳関係は毎年日本山岳会派遣のものか、大学派遣のものに使用されている。最近では日本山岳連盟派遣ジュガル・ヒマラヤなど。一九六〇年も日本からネパール・ヒマラヤにはすでに三隊の許可があり、山岳向けの外貨は予定の隊が使用しているため、私たちには全く認められなかった。それゆえに私たちの申請する外貨は、一般外貨の使用を許可してもらうわけで、その道のたしかかな人の予想では到底むずかしいということがわかつ